

令和元年度 第3回 学校運営協議会まとめ

大阪府立泉北高等支援学校

- 【1】 実施日時 令和2年1月24日（金）午後3時30分～午後5時00分
- 【2】 実施場所 本校応接室
- 【3】 出席委員 田村 仁彦氏（元堺市立上神谷支援学校 校長） 協議会会長  
八田 忠敏氏（元社会福祉法人コスモス理事長） 会長代理  
松林 利典氏（堺市障害者就業・生活支援センター センター長）  
井上 直子氏（堺市子ども相談所 参事）  
北尻 一乃氏（大阪府立泉北高等支援学校 PTA 会長）

【4】 内 容

① 開会(教頭)

配布資料を確認

本日の協議会の成立を確認

② 校長挨拶

③ 会長挨拶

④ 協議

[1] 校長より「平成31年度学校経営計画」等について資料をもとに説明

1 生活自立コース、社会自立コース、就労支援コースの教育課程及び授業内容等の充実を図る。

(1) 学校全体で教科指導について取り組んでいる。シラバス、個別の教育支援計画を明確に作成していく。通知表を読みやすい様式に変更し、この分野の学校教育自己診断の肯定率が3ポイント向上した。

(2) 校内外実習について

就労をめざす生徒の意識の向上にむけて、キャリアプランについての座学を必要としている。今後就労支援コースに求められることである。学校教育自己診断の結果は85%である。

(3) 個別の教育支援計画・指導計画について

ワーキングチームを立ち上げ見直しを進めた。通知表の書式の統一を実施した。学期初めの目標設定をしっかりと行い、目標に対する評価をし、達成できたところ、できなかったところを明確にし、次につなげる。個別の教育支援計画は新しい書式を作成し、次年度から始める。中学校からの個別の教育支援計画の提出率の100%をめざす。幼少時、小学校時からの情報も引き継ぎ、生徒像の理解をしたい。堺市立支援学校に協力を依頼する。

## 2 支援教育力の向上

### (1) 思春期の課題への支援について

性に関する課題に対しては引き続き、ライフスキルの中で充実を図る。3年間学ぶ座学を突き詰めることで、生徒がじっくり考える時間をもてるようにしていく。

### (2) 堺市教委、堺支援学校、本校での地域連携について、

府立の本校も堺市内の小中学校の教育相談を堺市と連携し、共に実施することとなった。本校生徒のケース会議においては、今後も地域の福祉関係機関と連携をする。また、就労した生徒のアフターケアについても、エマリスさんと協働して行っていく。

### (3) ICTの活用について

若い世代の教員を中心に進んでいる。すべての生徒がICTに触れる機会が持てている。教材のライブラリ化を進める。インターネット共有フォルダ内に作成していく。小中学校の教科書を集め、教材研究をしていく。

## 3 安心で安全に学べる学校の環境づくり

(1) 生徒の手洗いや歯磨き、エプロン付けなどの指導については生徒に習慣が浸透している。生徒間の関わりの中にも人権に配慮していく必要がある。

### (2) 防災計画・BCPについて

避難訓練の際に、生徒には避難に徹せよと話をしている。備蓄品については確保できている。

### (3) 部活動、生徒指導について

部活参加延べ人数は108名。バスケットボール部、ソフトボール部は近畿大会にすすんだ。いじめの場面は見られないが、今後も継続し環境づくりを行っていく。アドプト、挨拶運動などにも引き続き取り組んでいるところである。

## 意見等

- ・個別の教育支援計画について、だれが作成して、どのように活用していくか。当事者本人が知る必要がある。本人の環境整備の手立てとして、本人とともに作り上げていくという視点が大切である。書式に統一性がないことが課題である。本人と作りながら、自分自身でどう伝えていく力が必要である。働くとは、社会人とはなど、経験者から聞くことも大切である。同じ就労をめざしている方からの話をきくピア活動の取り組みでは、当事者が成功した経験も、失敗した経験も話してもらう。当事

者の話を聞くことがよいきっかけになることもある。

- ・個別の教育支援計画について「つなぐ」ことが重要である。形として残すだけでは、本来の主旨からずれていく。「人」の作業であり、大切なことを見失ってはいけない。
- ・支援のバトンとなるようにつなぐことが大切である。
- ・個別の教育支計画は支援計画を作成するだけでなく、どう活用されているかである。そのためには話し合う時間が必要。その時間がなかなかとれないのが実情ではあるが、非常にもったいない。
- ・支援者が話し合う時間を増やす、どう記録に残すのかが大切である。ホワイトボードなどを活用する方法もある。
- ・めざす学校像、計画を何のために作りあげているのか、共通認識をもたなければならない。働くことで自分が成長できる、人の役に立つ、ほめられるということを共有していく。1人1人違いがあるところは学校の領域である。

## [2] 学校教育自己診断について

アンケートの診断結果について教頭より報告

生徒のアンケート結果では全体の傾向として、人権やキャリア教育についてのポイントが比較的低い傾向にある。行事の取り組みの際に、目標や意義の説明を明確にする必要があると考える。振り返りの機会も充実させる。保護者のアンケートの結果では28項目中26項目で70%以上の肯定率となっている。昨年度より全体的に肯定率が高まっている。いじめについても、いかなる事案もゆるさないという方針で今後も指導を継続する。授業の内容の充実も引き続き行う。

教職員のアンケートについては34項目で60%以上。24項目で70%以上となり、全体的に肯定率が低下した。生徒数の増加に伴い、教員数も増加し、過去最大の人数である。教職員の転換期であり、世代交代の時期でもある。過渡期であると考えている。

## [3] その他

保護者からの意見書、校長Dメールについて教頭より「なし」と報告

### ⑤ 校長より謝辞

### ⑥ 事務連絡

次回の日程について、日程を調整して連絡